

ポンド、短期的には下押し圧力も

- ◆ポンド、ロックダウンの完全解除をめぐる不透明感で下押し圧力がかかりやすい
- ◆ポンド、景気回復期待や資金流入が支援材料
- ◆加ドル、加中銀のタカ派姿勢や原油高が支えも伸び悩むか

予想レンジ

ポンド円 151.50-155.50 円

加ドル円 88.50-91.50 円

7月5日週の展望

ポンドはロックダウン（都市封鎖）の完全解除をめぐる不透明感も嫌気され、短期的には下押し圧力がかかりやすい。また、米金融緩和策縮小の思惑が強まっていることや、今年の円安に歯止めの兆しが見られていることなどから、対ドル・対円で上値が重くなっている。イングランドのロックダウンの完全解除は4週間延期され、19日に解除される見通しだが、インド型変異株の感染拡大で不透明感が強まっている。新たに保健相に就任したジャヴィド氏は、「コロナ感染リスクをゼロにするのは難しくコロナとともに暮らしていく道を見つけることが必要」と、変異株の感染がさらに拡大し、死者数や入院患者の増加につながらない限り、予定通り措置を緩和する可能性を示唆しているほか、ジョンソン英首相も19日の完全解除に自信を示している。ただ、変異株の感染が急増し、1日のコロナ新規感染者数が2万人超と1月末以来の多さになるなど、感染の再拡大への懸念も強まっていることも事実だ。

また、イングランド銀行（BOE）が早期の引き締め動くとの思惑が後退していることもポンドの上値を圧迫しそうだ。ベイリーBOE 総裁は英国の急成長は数カ月以内に失速する公算が大きいとし、一時的に高まる成長率とインフレ率に過剰反応しないことが重要だと強調した。市場ではBOEが年内にインフレ率が3%に達しても容認するとの見方が強まっている。8月のBOE会合では経済見通しが上方修正される可能性はあるが、一時帰休労働者への支援が9月末に終了することもあり、大きな政策変更を行う可能性は低い。一方で、規制緩和に伴い景気の回復が順調に進んでいることや、英資産への資金流入がポンドの支援材料となる。米金融大手バンク・オブ・アメリカ（BofA）の発表によると、第1四半期の英資産への資金流入額は1200億ポンドと2008年以來の大きさと、今後数四半期は資金流入が加速する可能性があるという指摘した。

加ドルは伸び悩む展開が続くか。6月は米連邦公開市場委員会（FOMC）でタカ派寄りの見解が示され、ドル高・円高が進み、加ドルも対ドル・対円で下落したが、他の主要通貨に比べると下げ幅は限定的にとどまった。カナダ中銀（BOC）が早い段階で金融緩和の縮小姿勢を示したことや、原油価格の上昇が続いていることが加ドルの支援材料となっている。カナダではワクチンの接種率が80%を超え、コロナ新規感染者数が減少しており、BOCは7月の会合で債券購入額の縮小に踏み切る可能性もある。ただ、米加の金融政策見通しの格差が縮小しており、積極的に加ドル買いを進める地合いにはなりにくい。

6月28日週の回顧

ADP雇用データを背景に全般ドル高が進み、ポンドドルは4月中旬以来の安値水準となる1.37ドル半ばまで下落した。1-3月期英GDP改定値（前期比）は-1.6%と速報値の-1.5%からやや下方修正された。ドル/加ドルは1.24加ドル半ばまで加ドルが売り戻された。4月加GDPは前月比-0.3%と市場予想の-0.8%を上回った。対円では市場のリスク選好姿勢の回復で底堅い動きも対ドルでの下落が重しとなり、ポンド円は154円前半、加ドル円は90円前半で伸び悩んだ。（了）